

死者と時間

末本文美士

一、冥顕の世界観と時間

ご紹介いただきました末木でございます。このような充実した学会の場にお呼びいただきまして感謝しております。皆さんの方からご質問、ご意見をちょうだいできるかと思っております。タイトルは早くから考えたいと思っていたテーマでしたが、内容の方はまだ試行錯誤の途中というところでお許しいただければと思います。

私は実践的な人間ではありませんので、3・11の問題とか内面深く受け止めてはいるつもりであります。現場で活動したりとかということはしておりませんし、自分としてもできない人間として何をどう考えていったらいいのかというスタンスでやっております。

死者の問題はここ 10 年くらい考えてきましたが、なかなか研究史としてきちんとして継承できるものがなかったので、いろいろあっちにぶつかり、こっちにぶつかり試行錯誤しています。「他者」という問題から出発していますが、「他者」ははっきりした定義を考えておまして、「合理的、理性的な理解が不可能ではあるが、かかわらざるをえないもの」を他者と考えています。合理的な手段でコミュニケーションして、話せばわかるという領域を超えたところで、しかしそれでも何かかかわりをもたざるをえないものと、どういうふうにかかわることができるのか、それが大きな基本的なテーマであると思っています。図をご覧ください。その中に「他者」とありますが、歴史的な思想史の用語を使って「冥」の領域とも呼びまして、この中に 3 つの階層を考えることができるのではないかと考えています。第一は「生きている他者」、もうちょっといい術語を考えたいと思っていますが、つまり私たちは互いに顔をあわせて、一応コミュニケーション可能である。しかしコミュニケーション可能であるけれども、実のところ、その相手の深いところはわからない。自分自身を考えてみても自分でわかっているかという実とはわからない。そのように現象世界で直接つきあっていて、しかも底がわからないものを仮に「生きている他者」と名付けています。

これが第一階層とすれば、「死者」は第二の階層に属するものではないかと思います。ここで「時間」という問題が直ちに出てくる。過去においては「顕」の領域に現象するものとしてつきあっていた、しかし今は現象的な意味でいえば不在である、いなくなってしまう。しかし何らかの形でつきあわなければならない。したがってそこに過去と現在という時間性的問題が入り込んでくる。

第三の階層ははじめから時間性を超えているともいえるし、完全に超えているわけではなく、そこは曖昧なんです、妖怪とか神々、仏とか、通常の時間性の中でとらえきれないようなものがある。私は仏は時間性をもつだろうと思っているのですが、ともあれ通常の時間とは異なっている。それを第三層とする。他者の「冥」の領域のものたちは、このように3つの層に分けられる。しかもそれが時間性の面から分けられていくのではないかと考えております。

そのことをある研究会でお話しました時に、そのような時間性は、我々の通俗的な時間を前提としていないか、過去・現在・未来について粗雑な時間でものを考えていないかという批判がありました。私自身、それは以前からひっかかっていた問題で、そこで時間性ということについて考えてみたいと思ったわけです。

具体的に言いますと、死者の過去性ということは、現象世界で、我々が「顕」の世界でつきあっていた人が、今、不在である。したがって現在というところからいえば、今はいない存在にもかかわらず、まさに不在の故に、現在という時間の中で欠如しているが故に、かえって現在に働きかけてくるという不思議な性格をもっている。現在いないものがなぜ不在の故に、「いないにもかかわらず」ではなく、逆に不在であるが故に力をもつという性格がある。死者には過去性が張りついてにもかかわらず、それが現在という時間の中で働いてくる。そうすると単純に過去・現在・未来という常識的な時間のとらえ方ではとらえられない。過去が現在の中に闖入してくることで、平坦な時間というものが破壊されてしまうのではないか。そうすると、もう一度、時間という問題を本質的に考えなければいけないのではないかということになってきます。

もう一つさらに大きい領域で考えていくと、歴史というものがかかわってきます。大災害と言っても、我々が直接、身近な死者をもつとは限りません。私自身にしても、直接亡くなった親しい知人はおりません。にもかかわらず、それが我々に大きくのかかってくるとしたら、死者の見方自体を変えていかなければならないのではないか。かつてひと頃いわれた「二人称の死」という見方では、人称論的な見方で、身近なも

の死というものが、どれだけ大きな衝撃を与えるかということ、二人称という形でとらえてきた。しかし大量死を考えてみると、人称論ではとらえきれない、二人称でもなければ三人称ともいえない、人称論的な死者のとらえ方では理解できない種類ではないか。

それは実は震災の問題だけではなく、それ以前に戦争の死者の問題が大きいのかにかかってきていました。戦争における大量死の問題、あるいは今、問題になっている従軍慰安婦の問題にせよ、大虐殺にせよ、死者にかかわってくる問題ですが、そうした問題は過去の戦争であるにもかかわらず、まさに現在の問題としてのしかかってくる。それは記憶論の問題として議論されてきたのですが、しかし記憶という心理学的なとらえ方だけで理解できるのか、心理的なものをもっと超えて大きい問題ではないか。心理的な記憶の問題だけであれば、記憶の風化ということかいわれるように、風化して直接関係していた人が死んでしまえば、それはなくなるはずですが、にもかかわらず、過去の死者は消えてなくならない。そうすると単なる記憶論では解決つかないし、解決つかないために集団記憶と言いますが、集団記憶というのは自己矛盾な言い方でありまして、集団記憶がどこで成り立つかということ、かなり無理がある。死者の問題を大きく見ていくと、歴史問題としての過去という問題にまで広がってくるだろうと思っています。

二、時間論の諸相

そこで過去の問題が常識な時間論ではとらえきれないとしたら、どう考えたらいいかということで、まず「時間論」というものがこれまでどうみられてきたかをおさらいした上で、死者の時間というものに話を進めたいと思います。

時間論については、哲学者による研究がいくつも出ておりまして、そういうものを少し読んでみました。出発点はゼノンのパラドックス、アキレスが亀に追いつけないという話です。そこで哲学的な課題としての時間が出てくる。時間だけではなく、時空、つまり空間の問題もかかわってくるわけですが、それに対する答えとしてアリストテレスの整理がなされて、さらに古典的な時間としてはアウグスティヌスの時間論が前提になった上で、近代的な時間論がカントによって完成される。それはニュートン力学を哲学的に基礎づけ、時間・空間は直観の形式とされたわけです。ところが 19 世

紀末～20世紀にかけて、ニュートンの古典的な力学の体系が揺らいで、そこから相対性理論とか量子力学ができあがってくる。その時期にベルグソンとかフッサールの理論が出て、再編がなされていく。そんな図式になってきます。現在でも、哲学の書物を読むと、その頃の時間論の問題意識からそれほど大きく抜け出していないように思います。いちいち細かく検討することは省略しまして、ここで考えられている哲学的な時間論の問題点を、いくつか上げておきました。

一つは20世紀はじめに出てくる時間というのは、生きられた時間、体験される時間、意識の時間をどうあつかうかという点で、客観的な立場に立ったカント的な時間と対比される形で出てきます。そうすると、否応なく、現在の意識の中に過去が浸透しているという問題が出てくる。つまり、時間の連続は、過去と現在が重層しなければならない。

したがって、意識の中の時間というのは、一瞬だけでは意味をもたなくて、その前後があって初めて流れとしてとらえられるわけで、したがってその時に現在と過去・未来というものがどう関連してくるか、非常にミクロ的な領域に限られてしまう。時間というものは大きいレベルで、人の一生であるとか、人の歴史とかという問題が入ってこなければならないが、それが除去され、かなり抽象化された形でミクロ的なレベルになってしまっているのではないか。実際には、時間という問題は単純に流れとしてだけでとらえきれないものがかわってくると思います。

最大の問題は、哲学的な時間論は、過去から現在そして未来へと流れていく一方向の流れでとらえられてしまっているのではないか。しかし、実際には「めぐる時間」というものがあるのではないか。哲学の理論の中では、めぐる時間というは原始的なものであって、今日の問題ではないということで、ほとんど正面から採り上げられていない。しかし我々の根底にあるのは「循環」というとらえ方があるのではないかということが一つのポイントになります。

また哲学者の時間論は、ほとんど西洋哲学の枠で考えられてきた。ゼノンのパラドックスのような問題は、竜樹などによっても議論されていますし、あるいは瞬間をどうとらえるかも刹那滅の問題として議論されてきた、そういう問題が抜け落ちてしまっているのは、おかしいのではないかというような問題があります。通常、哲学的な時間論というのがいちばん根本的だと考えられているのですが、今日の哲学的な時間論は、かなり限定された枠の中で行われている議論であって、ほんとうの意味で根源

に戻るような議論になっていないのではないかとということが、いくつかの本を読んで感じたところであります。

それに対して科学の世界などでは、もっと深く時間というものが考えられていて、たとえば今日の宇宙論では、時間の起源というような問題が議論されている。かつては哲学的な問題とされていたことが、科学の世界の中で議論されています。相対性理論の時間にしてもそうですし、ブラックホールなどでは、時間というものがそれこそ極限的なところで問題となる。かつて 20 世紀の始めの頃までの哲学の中で議論されてきた時間が、ほとんど通用しなくなっているのは、科学の世界においてもはっきりしてきているわけです。

そういう中で一体、時間はどのようにとらえられるのか。もう一つ重要な時間のとらえ方がありまして、過去から現在、未来へと流れていく常識的で単純な時間ではなく、もう少しそれを日常性を超えたところからとらえ直すという考え方が出てきております。たとえばその典型がハイデガーの場合です。ハイデガーの『存在と時間』では、自分の死という到達できないものに対して先駆することで、本来性を取り戻そうとするのですが、やはり不自然な無理なものになってしまう。日常性を離れて、現実の問題となりません。

宗教哲学的な面からも時間論がありまして、永遠論の問題として議論されています。たとえば代表的なものは波多野精一の『時と永遠』で、時間性を超えるところに本当の永遠がある。単純に時間否定ではない形で永遠を考えられるのかどうかということを議論しております。キリスト教的な世界観からの時間論として優れたものであると思いますが、しかしキリスト教的な考え方を前提とすれば成り立つかもしれませんが、その枠を外した場合には納得がいかない。我々の日常感覚と照らし合わせた時にびったりしてこないという疑問があります。

宗教学では、エリアーデの『永遠回帰の神話』のように、循環的な時間というものを根底においています。人類学的な調査に基づく膨大な数の事例を上げていますが、逆にそれが我々の日常性にどうかかわってくるのかということが、もう一つわからないところがある。そう考えると、もう一度、日常的なところから時間をとらえ直すことが必要でないかと考えられます。

仏教の方ではどうなのか。無常というのは、時間的にものが変化するということであり、時間性が入ってくる。時間の問題は仏教の根本問題です。それを理論的に追い

詰めていくところに「刹那滅」という問題が出てきて、無常の観念を極限化して、一瞬、一瞬で変わってしまうという理論が完成されました。刹那滅論は仏教の全体を通して基礎になるものですが、それをどう説明するかということでいろいろな立場が出てきます。説一切有部の理論では、それを説明するために過去・現在・未来というものが実在するという三世実在説という一種の矛盾した理論になる。それに対して、竜樹の批判がなされることになります。

ただこのように理論化したものは哲学的理論と同じで、ミクロ化した理論でありまして、現実から外れてしまいます。もっとマクロ的な理論が抜け落ちてしまう。仏教にもマクロ的な時間論があり、一つは個人の輪廻の問題があり、もう一つには宇宙自体が生成してやがては壊れてしまうという具合に、宇宙的な時間も循環論的にとらえていく。そういうふうを考えていくと仏教の時間論も単純にはいかないということですが、そこには今日は立ち入りません。

それでは、日本人の考え方の中には時間がどういうとらえられてきたか。もともと循環というものを基本としてきたところへ、循環だけではとらえられないものが入ってきているということは、だいたい予想がつくところであります。

そうすると、時間論の問題というのは、一つは進行していく時間と循環していく時間がどうかかわっていくかという問題、もう一つ、過去・現在・未来ということが、どこに由来するのかという問題があります。その際、重要な問題で誰も指摘していないのですが、過去・現在・未来という言葉は、全部仏教用語です。中国の古典には過去・現在・未来というのは出てきません。サンスクリットの文献には出てきて、それを漢訳する際に、仏教と一緒に中国に入ってきます。「時間」という言葉も中国の古典にはなくて、仏典に出てきます。ただし、仏典の場合、「時の間」という意味であって「時間」という抽象化された意味で、「空間」と対比されるようには使われておりません。

進行していく時間と循環的な時間とはどうかかわっていくか。循環の方が基本にあるだろうと思います。我々は時計をみると、デジタルな時計ではそうではないんですが、アナログの時計であれば 12 時間で一回りする。12 時間というのは半日ですが、基本は 1 日の循環です。進行していく過去・現在・未来というとらえ方ではなく、循環の中で、1 日の中で、今どこに位置するかという把握であって、そこから出発しなければならないだろうと思います。これは単純に太陽が出て昼になり、沈んで夜にな

るという 1 日の循環の中で考えられる。太陽と密接に関係しているわけです。一月は月の満ち欠けで 1 ヶ月とする。それに潮の満ち引き、女性の生理とかが相関的に考えられていく。これも循環していく。さらにいえば 1 年も、そうです。まさしく四季の循環で考えられていくものです。

基本的には時間は循環していくものと考えられます。それをもっと大きいレベルで考えれば、人の一生も、循環の中におさめこんで、生まれ、そして死んでいくという循環の中でとらえられるものであろうと思います。人は、ある年齢がくれば衰えて死んでいく。その代わり新しいものが生まれてくる。そういうことが循環していくから生活が成り立っていくわけで、その循環が壊れたら大問題になるわけです。そういう循環性が、ミクロ的な場でいえば刹那滅にしても、同じように刹那が繰り返し現れては滅していくということで、その点からいえば、刹那の循環というものが考えられる。巨大なマクロ次元で考えれば、宇宙的なものが循環していくという考え方になっていく。ただその循環というのは全く同じものではない。1 日 1 日の循環であっても、その日と次の日、昨日と今日、明日というものが同じように太陽が出て沈んでいくんですが、完全に同じものではありません。その中でも 1 日は違う。違いをもちつつ、その違いが循環の中で修正されていく。それが積み重ねられていくのが生活であると考えていいのではないかと思います。

それに対してそれが崩れていくところに進行する時間が考えられるわけです。進行的な時間をどういうふうにとらえられるか。実はそこで死者の問題がかわってくるのではないかと思います。

三、死者と時間

それはどういうことか。死者は、基本的にいえば循環の中に入っていくもので、繰り返されていくものであるからこそ、亡くなっていく人をどう弔えばいいかという知恵が積み重なっていく。それと同時に絶えず新しい命が生まれていくということが成り立つわけです。

ところが矛盾したことです。死者は循環の中に入っていくものであるにもかかわらず、ある特定の死者を考えた場合、その死者は時間の循環の中に入りきれない。あの人亡くなったということで、そこで時間が断ち切れ、循環が断ち切られていく

という性格をもつ。時間の循環の中に突き刺さった異物のようなもので、時間の流れを止めてしまう。その人が亡くなる以前の時間と亡くなった後の時間は、全く異質なものになるのです。したがって、同じ時間は取り戻せない。我々は過去・現在・未来の流れの時間の中で、死者は過去にいて、今いないと常識で考えるわけですが、実はそうではなく、過去は時間の流れを止めてします。矛盾した言い方ですが、過去は過ぎ去らない。死者は過去として流れ去っていかない、そういう性質をもっている。死者の取り返しのつかなさ、そこで時間が完全にストップしてしまう、そういう断絶を生むことが、死者と時間という問題を考える場合、もっとも重要なことだと思います。

そこでは、発想そのものを転換させていく必要があるでしょう。常識的には、流れる時間の中に過去の死者が位置付けられる。死者もその流れに沿ってどんどん過ぎ去っていくはずです。ところが、そうならない。時間に突き刺さって動かないとすれば、実は動かないということが過去の本質ではないのか。つまり過去とは過ぎ去って流れることではなく、逆に流れないこと、流れを止めてしまうことが過去の本質ではないのか。

そうとすれば、死者が初めて過去をつくると言ってもよいのではないか。過去の中に死者がいるのではなくて、死者が流れを止めることによって、取り返しのつかない過去というものをつくりだしていく。過去という時間性をつくるのは、まさに死者そのもの、死者の働きではないのかと、逆転して考えるべきではないか。それが、今私が考えている基本的なところ です。

死者の過去は修復不可能です。生きていても、怪我をしたり、病気をしたりして、ある意味では元に戻らないこともあるのですが、それでも生きていれば日常を復元していくことができる。したがって循環を可能にしていくことができる。しかし死者は、それを決定的に修復不可能な、取り返しがつかない形にしてしまう。そこで、死者に関しては、亡くなったところから「不在」ということを受け止めなければならない。それが過去ということの意味するのではないかということです。

そうはいっても、矛盾したことです。取り返しのつかない過去でありながら、その過去が、やがて溶けていく。取り返しのつかないという基本的なあり方、修復不可能性を持ちつつも、それが流れていく。それが自覚されていく時に、過去が時間の中に「流れる過去」となる。「流れない過去」から「流れる過去」が生まれてくるのではないか。そのように今、考えています。それを考えていくためには、死者の変貌、即

ち、死者が動かないものであるにもかかわらず、動き、変わっていくという矛盾した性格を考えなければならない。

では死者はどのように変わっていくのか。そもそも我々が生きている中で、命をえた段階から、その中に死が内包されているわけですが、それが現実の問題としてやってくる。突発的な即死もありえますし、病気もあって、時間の経緯の中で死がやってくる。死は瞬間でとらえきれないものとしてやってきます。脳死の問題を考えた場合、なぜそれが問題なのかといえば、時間的に切れないものを、時間的にあるところで切らなければならないという無理なことをやるために、どの時点に死としてみるのか問題になる。逆にいえば、まさに瞬間では切れないものとして、連続の中で生者は死者へとだんだん移行していくと考えなければならないでしょう。先程いったように死者が突き刺さる、時間の中につきささって時間が止まる。しかし、死の時間設定は、既存の時間を確定して、死の瞬間を決めようとする。何時何分にご臨終になりましたというようなことではとらえられない形で、もっと根源に、死者の時間への突き刺さりというものがあると考えられます。

そういう中で死者の変貌を考えますと、時間的に特定できないけれども、しかし必ず死がやってくる。遺体という形で身体をもった死者が、やがて日本の場合、火葬されることによって身体なき死者へと変わっていく。それは大きな死者の変貌になると思います。それまでは形をもっていたのが、まさしく「不在」そのものになるわけです。「不在」となった身体的、形態的なものが死者として変貌していく。そこに、アラタマ的な性格、荒々しい性格から、やがて穏やかな恩恵をもたらすようなニギタマ的なものへと死者の変貌が起こってくるわけです。その中でだんだん死者は遠のいていく、そして過ぎ去っていく時間の中に埋め込まれていく。

その過程において死者と生者は深いかかわりをもっていく。生者の側からいえば、死者という過去が、まさしく今度は、流れをもっていく時間の中で、過ぎ去らない過去が、しかしやがて過ぎ去らないにもかかわらず、過ぎ去っていく、それを今取り戻していくことになる。それも意図的にするのではなく、「不在」として、欠如として、いないものとして、今に入りこんでくる。過去というのは死者によって時間の中に突き刺さって動かない。それが突き刺さったままで、まさしく死者の「不在」が持続していく中に「現在」というものがつくられていくのではないかと考えられます。

その中で死者が蘇る。生きているものの方が積極的に働きかけて、死者を左右でき

るものではなく、死者の側が、いかに我々に現れてくるかという意味で、生きているもの、生者は受け身にならざるをえない。例えば、アラタマ的な死者は生者に対して責める、悪くいえば生者に対して危害を加える。危険を及ぼすこともある。生者は負い目をもつ。「ああすればよかった」という悔悟もありうるし、さまざまな形で負い目を負わされていくわけです。たとえば、身体的な不調という形で現れる場合もある。死者は、さまざまな形で我々に対して、生きているものに対して攻撃的な面をもっている。そこでそれを宥めることが重要な意味をもってくるわけです。

死者のこの側面を一番強くいったのが上原専禄という人で、上原は「死者が裁く」という言い方をします。死者こそが裁き手であって生きているものは裁かれる。したがって裁く死者とともに闘わなければならないとして、死者との共闘をいうわけです。死者からの責めを生者は受け止めなければならないということです。

もう一つは死者が恩恵を与える側面も出てくるわけです。これは死者によって生きているものが救いを与えられるという面で、これを言ったのが田邊元です。

死者論という問題に関して、先駆者はこの二人くらいしかいないのではないかと考えていますが、正反対の側面を指摘しています。上原は責める死者、裁く死者、それに対して田邊は助けてくれる死者、救ってくれる死者、死者との実存共存ということを行います。田邊は、禅の『碧巖録』から例を取っていますが、それは亡くなった師匠の教えに、はじめは弟子は気がつかなかったのが、悟った時になって、じつはずっと亡くなった死者が自分を導いてくれたんだということに初めて気がつくという話です。死者の導きによって生者もまた悟りの世界に導かれる。菩薩によって新たに菩薩となるというので、死者を含んだ新しい循環を考えようとしている。そういう両面を我々は考えていかなければいけないだろうということでもあります。

ここで触れておかねばならないのは歴史という問題です。過ぎ去らないはずなのに過ぎ去る、過去というものが、まさしくそこに立ち止まっているにもかかわらず、遠く離れていく、そして歴史というものになっていくわけです。その場合、どのようにかわっていくのか。たとえば死者の生前を知っていれば、死者と直接かわっていくことが可能であったのが、過ぎていくと死者と生者とがだんだん離れていくために、直接死者の声を直ちに聞き入れにくい状況になっていく。その中で、死者を呼び出すために、書かれたものが重要な意味をもってくる。書物を通して過去が今に蘇ってくるというのが歴史というものだと思います。語っているのを聞くのは同時的なことで

すが、書いたものを読むというのは、そこに書いた時と読む時の時間差が出てくるわけです。その断絶が歴史というものを生み出していくことになるのではないか。そういう意味で、書かれたもの、痕跡というものから、いかにして過去から立ち上がってくるかという歴史の問題が生まれてくるのではないのでしょうか。

もう一つ触れなければならない問題が、それでは未来はどうなるのか、ということです。死者を考えていく時、立ち去らない過去にもかかわらず、立ち去ることによって「不在」としての現在が生まれてくる。過去と現在までは出てきますが、未来というのは、まだ私の理論の中では十分に解明しきれていません。ただもちろん未来といふものが新しく生まれ出る命によってつくられるものであるということは確かです。新しい命が生まれるということも、ちょうど死者が過去として、亡くなる前と亡くなった後との間で絶対的な断絶があるのと同じように、新しい命が生まれる場合も、命が生まれる前と生まれた後との間には絶対的な断絶がある。それまでの循環の中に回帰できないようなものが入り込んでくる。その意味では未来というのも別の形での断絶が重要な意味をもってくると思います。ただその新しく生まれた命は「不在」ではなく逆に新しい循環という「充実」を生み出していくという基本的な性格があるのではないか。そこに未来というものが過去と違う性格をもってくるのではないかということが考えられるのではないかと、多少仮説的に考えています。

死者が他者の第三レベルの神仏とどうかかわるかということまで、お話をさせていただくつもりでしたが、時間が参りましたので、ひとまずここでお話を終わらせていただきたいと思います。どうもつたない話におつきあいいただきましてありがとうございました。

コメント 【澤井義次（天理大学）】ご紹介いただきました澤井でございます。ただ今は、末本文美士先生のご講演を聴かせていただいて、いろいろと学問的に刺激を受けました。ほんとうに有難く思いました。末木先生のご講演に対して、どれだけコメントさせていただけるかどうかは分かりませんが、ご指名ですので少しコメントをさせていただきたいと思います。

先ほど公開講演の前に、末木先生と少しお話をしていたことなのですが、末木先生がご講演のレジュメに書かれた図式は、世界の宗教的コスモロジーを理解するうえでも、現代宗教学の概念的枠組みを再検討するうえでも、とても示唆的で参考になると思います。まず、このことについて少し述べたいと思います。宗教学の研究領域において、宗教学者のルードルフ・オットーといえ、宗教学の古典的名著『聖なるもの』によって世界的に有名ですが、私は約30年前、アメリカのハーバード大学での留学を終えて帰国する前に、私の恩師でハーバード大学の世界宗教研究所長であったジョン・カーマン先生から、「いつか、ルードルフ・オットーのインド宗教研究について研究をしてはどうか」と言われました。それまでも、少しはオットーの著書を読んでおりましたが、先生の助言もあって、私はオットーのインド宗教研究に関する著作を掘り下げて読むようになり、日本宗教学会の学術大会では、しばしばオットーの宗教研究について研究発表させていただいてきました。

オットーはドイツのマールブルク大学における組織神学の教授で、ルター派の神学者でもありました。オットーは末木先生が見事に表現された図式では、一神教の世界観、すなわちキリスト教的世界観を彼自身の宗教理論の背景にもっていました。彼は1911-12年にかけて東洋への旅をしたのですが、まず、彼が訪れたのはインドでした。その後、日本も訪問し、1912年4月11日には、日本アジア協会で「東洋と西洋の宗教の展開における平行性」というテーマで講演をしています。ともあれ、オットーが見たインドの宗教は、彼の目にはキリスト教とよく似たものとして映りました。それは彼がキリスト教的な世界観から、ヒンドゥー教における神と人の関係を垂直レベルでとらえようとしたからです。末木先生が「日本宗教史に基づく世界観」として明示しておられますように、西洋のキリスト教的な世界観と東洋の日本宗教的な世界観では、神と人の関係がかなり異なります。インドの宗教は、末木先生の視座からみれば、日本宗教史にもとづく世界観も踏まえて理解する必要があると思います。

ところが、オットーはキリスト教的な世界観から、インドのヒンドゥー教を理解しようとしたのです。末木先生がこの図式で示しておられますように、彼はヒンドゥー教における神と人の関係を、キリスト教における「他者」のイメージ、垂直レベルの超越的な神のイメージで解釈しようとしたと言えるでしょう。つまり、オットーはヒンドゥー教のヴィシュヌ神やシヴァ神にみられる一神教的な神概念を取り上げて、それらがキリスト教における超越的な神概念とパラレルをなしていると理解したのです。

しかし、ヒンドゥー教が内包している、末木先生が言われる神々とか死者、生きている他者という、いわば水平レベルでの「他者」については、ほとんど全く見過ごすことになりました。オットーがキリスト教の世界観に立脚しているかぎり、多様なヒンドゥー教世界を理解することは無理であったのかもしれませんが。こういう点に注目しますと、特に1990年代以降、世界的に宗教学界では、従来の宗教学の概念的枠組みが再検討されていますが、末木先生はこの図式によって、宗教学的に大変示唆に富む宗教の構造論を示してくださったと思います。

それから、末木先生が提示された「死者論」はとても興味深くて、いろいろと刺激を受けました。私はこれまでも宗教のあり方を考えるうえで、自然科学的な世界観とその特徴について関心をもってきました。世界を自然科学的な視点からとらえますと、空間は等質的な空間として、また時間も等質的な時間として理解されます。ところが、たとえば、宗教学者のミルチャ・エリアーデが論じたように、空間に「ヒエロファニー」（聖体示顕）が生起すると、その特定の空間だけが他の空間とは異質の空間、聖なる空間になります。さらに等質的な時間にヒエロファニーが生起すると、その特定の時間が他の時間とは異質の時間、聖なる時間になります。たとえば、エリアーデが言うように、宗教学的な視点から時間をとらえなおしますと、末木先生の言われた二つの時間論、すなわち「進行的な時間」と「循環的な時間」の二類型を考えることができるでしょう。

「進行的な時間」とは、自然科学的で機械論的な時間といってもいいと思いますが、過去・現在・未来と移り変わっていく時間を私たちは生きています。日常的な生活の中では、そういう時間を生きているわけですが、それと同時に、伝統的な宗教観あるいは宗教的コスモロジーに見いだされる「循環的な時間」の中にも生きています。毎年、お彼岸やお盆になると、亡くなった先祖を思い起こし墓参りをする、また先祖が家に帰ってくるといった庶民的な信仰や慣習などがあります。私たちはそうした二重の時間を生きていると言えるでしょう。ここで二重の時間とはいっても、時間が二つあるのかというと時間は一つです。空間がただ一つであるのと同じように時間も一つです。そうした時間のもつ意味が、それぞれ一人ひとり、文化や社会によって違うといえるのではないかと思います。

哲学者のポール・リクールは晩年、時間論を展開しました。彼によれば、時間は物語の仕方で分節されるのに応じて、はじめて意味をもつといいます。物語はその語り

のまえに、すでに筋（プロット）があるといいます。一つの語りには、前もって個々の出来事をつなぐそれなりの筋があるということです。自然科学的な「進行的な時間」には、因果律（原因と結果の法則）に基づく筋書きがありますし、伝統的な宗教的コスモロジーの「循環的な時間」にも、日常的な生活慣習レベルにおける時間の語りにも、個々の出来事をつなぐ筋書きがあるのです。個々の出来事が私たちの生きている時間の中で、すでにこのように関係づけられているとも言えるでしょう。このような時間に生きる私たちの生を考えると、宗教哲学者の上田閑照先生が、私たち人間存在の根本構造は「二重世界内存在」ということにあると言われていることを私は想起いたしました。これはハイデガーの術語を援用して、上田先生が言われる言葉です。この言葉に込められた意味は、私たちがそうした二重の世界において、日々生活をしているということです。末木先生のご講演を拝聴しておりまして、「進行的な時間」と「循環的な時間」という時間の二重性の中で、私たちが日々生活している—そのことをいっそう深く理解させていただきました。

ところで、末木先生も親しくしておられる友人のお一人に、慶応大学でも教えておられる批評家の若松英輔さんがおられます。若松さんは新たな死者論を展開しておられますが、二年ほど前、天理を訪問されたとき、「天理教の教えでは、私たちが亡くなった後も、身体はずっとそのままなのですか」と尋ねられました。天理教の教えによりますと、私たち人間の身体は「かしの・かりもの」（貸物・借物）であると教えられます。私たちはこの人間世界を創造し、今も変わることなく守護しているとされる親神・天理王命から、私たちそれぞれが身体を借りていると言います。ただ、心だけは自分のものであると教えられます。高齢になって身体が着物のように古くなってくると、私たちは身体を親神にお返しをして、もう一度、新たに新たな身体を借りて、この世界へ生まれ変わってくると説いています。そこで若松さんには、「私たちの身体は、親神にお返しするのですが、魂は生き通しで、また新たな身体を借りて、この世界に帰ってくると教えられます」とお答えしました。ちなみに比較宗教学的には、インドの『バガヴァッド・ギーター』(II. 22) にも、よく似た句があります。ヒンドゥー教や仏教で説かれる「輪廻転生」の思想のように、「生まれ変わり」の思想あるいは「循環的な時間」論は、東洋の宗教思想に典型的に見られます。そこで末木先生にお尋ねしたいと思いますのは、死者論を論じられるとき、先生は死後においても生前と同じように、心と身体をもって生きていると考えておられるのかどうか—その点について、

少しお答えいただければ大変有難く存じます。

これまで長年にわたって、國學院大学の井上順孝先生が中心となって「宗教と社会」学会が、大学生の宗教意識調査を実施してきました。その宗教意識調査の結果によりますと、宗教にあまり関心がないという学生の多くが、生まれ変わりは信じているとのことです。こうしたことはアジア文化圏に見られる宗教意識の特徴の一つでしょう。このように「生まれ変わり」の思想も視野に入れて、今後は生と死の意味をとらえなおしていくことが肝心でしょう。従来の西洋的な時間論ではなく、東洋の精神風土に根ざした時間論にもとづいて、新たな死者論を展開していく時期を迎えているのだらうと思います。

ともあれ、私たちが日々見ている世界と、私たちがふだん見ていない、あるいは見えていない世界があります。それは末木先生が言われる「顕」の世界と「冥」の世界ですが、それら二つの世界が重なり合う、オーバーラップする中で、私たちは日々生活しています。そういう生と死の連続性の中で、もう一度、私たちが生きることを意味をとらえなおすことを求められているように思います。その意味では、一昨年のも東日本大震災が大きな転機になったと思います。それ以前まで、一般的に理解されていた「生きること」の意味に、「死をとおして生きること」の意味を重ね書きしていく。末木先生はハイデガーのいう「死への存在」にも言及されましたが、ハイデガーが言うような「死への先駆的な存在」とは違った意味で、私たちは東洋的な死生観を踏まえた死者論を新たに構築し、それを世界へ向けて発信していくことができるのではないのでしょうか。このようなことを末木先生のご講演を拝聴して痛感した次第です。ちょうど良い時間になりましたので、この辺りでコメントを終えたいと思います。どうも有難うございました。

リプライ 【末本文美士】

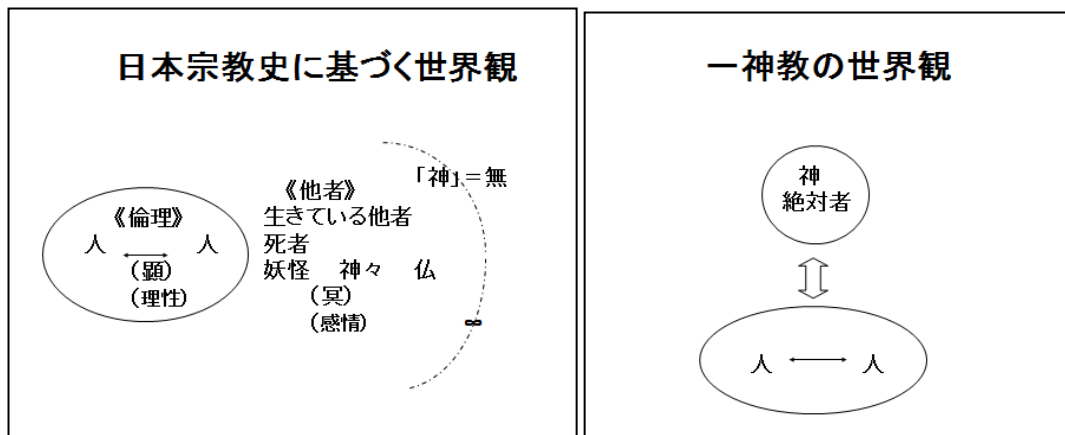
ご丁寧なコメントをいただきましてありがとうございます。最初に図式のことを説明しなかったのですが、こういう図を描いて、こういう理解をすると、キリスト教の方々からはお叱りを受けるのではないかと、あまりに単純化しすぎているということは承知しています。それは別にしまして、つくった時はほとんど考えなくて、後になって気がついたことは、世界観に水平型と垂直型というのがあるのではないかということです。あまり図式化するのは、よくないんですが、縦構造なのか横構造なのか、

何となく、ああ、そうだったのかと自分でも気がついたことがありました。そのことを補足しておきますと、そんなことに気がついてから、いろんなことを注意してみているんですが、龍谷ミュージアムで「極楽への誘い」といういい展覧会をやっているんです。あれをみて迎え講というのは、水平のところでやるんですね。二つのお堂の間を迎えにいて、こちらの方から向こうの方から迎えにいて戻っていく。現世と来世が縦にいくのではなく、水平に移動している、なるほどそうなのかと思いました。来迎とか上から仏さまはくるじゃないかとも思われますが、斜めからやってくるのであって、真上とか垂直構造とはちょっと違うということを思いました。そんなことからヒントを得ていただけることがあれば有難いと思うのですが。

今の日本の人は、死んだらどこにいくかという、天国にいくと答える。極楽にいくという答えは出てこないんですが、その時の天国のイメージは何かと不思議に思っているんですが、どうも雲の上あたりらしいようです。その意味ではかなり垂直型にはなっているんですが、垂直型といっても超越的なものではなく、手が届くくらいのところの上に位置しているのかなというイメージをもっています。かつての日本の社会、農村とかでは、異界は平面的で盆地の山の向こうとかという水平イメージをつくれたのが、今の大都市でビルが建っていると、視野が横にいく場所がなくなってしまって、残ってくるのは煙のように上にいく、それが縦型に変わってくる理由なのかな、などと思って、学問的ではないんですが、話題としては面白いかなというところですよ。

ご質問に戻りますが、魂の問題と身体の問題、天理教の考え方を初めて伺いまして、なるほどと思ったんですが、ただ身体と心が、必ずしも、分けられつつ分けられないことがあると思うんです。私が考えているのは、死んだらどうなるかという確定的な理論を唱えるのではなくて、死者の現象学とでもいうか、死者がどういうふうに見えるかという問題です。生きている人に対して「不在」として、いないものとして現れる現れ方が基本ですが、それがなんらかの形で、もう少し実体性をもった形での現れ方もありうるわけで、たとえば幽霊とか、最近でも3・11の後、幽霊の話題がありましたが、つまり死者がいかに生きている人に現れるかと考えたいので、死者自体がどうなっているか、身体のかたちをとるのかどうか、とかいうことは考えても仕方がない、わからないことではないかと。駒沢大学の池上良正先生が書いていることで、池上さんが若い頃、宗教学の勉強を始めたばかりの頃、おばあさんたちのグループについて

山に登った時に、途中でリーダーの人が亡くなった人の魂を呼び出す。そうすると亡くなった人が語りだす。それを聞いて「おじいさんがやってきた」とおばあさんたちがワーワー泣く。終わると、もうけろっとしてまた一緒に山を登っていく。不思議に思っ「さっきのおじいさんはどこにいるんですか?」「私も知らない、別にどこにしようと構わないでしょう」みたいな、それですごくショックを受けたという話を書いていまして、よくわかるというか、つまり亡くなった人が、どこにどういう形をしているか、とらえられないという方が自然ではないかと思っています。一応、お答えとしては不十分かもしれませんが。



(以上)